ピクニヤ・マケンナー——一九三一年の知識人の批判裡における ピクニヤ・マケンナー——書目。（泉井久之助）

●上代日本の社會及び思想　津田左右吉著

この書は「書紀の書きかた及び訓みかた」、「神とミコト」、「大化改新の研究」及び「上代日本人の道德生活」と題する、夫々獨立の四編の論文から成つてゐる。中初めの三編は嘗て一度史學雜誌若しくは史苑の誌上に發表せられたことのあるもの故、ここには主として最後の一編に就いてその論旨のあるところを紹介しよう。

この一編はまた「道德意識の發達」及び「道德生活の狀態」と題する二章に分れ、前章に於ては上代文獻の上に種々まじり合つて認められる道德意識上の事實をその發達の段階に從つて辨別し、それら相互の關係をあとづけることを意圖し後章は更にかやうな意識の根柢と考へられる道德生活そのものゝ狀態を家族形態、社會及び政治組織等の諸側面から明らかにしようとしたもので、兩章を通じて、上代の道德が概して自然に養はれた社會的習慣として行はれたもの、又は何人にも共通な從つてまた社會的に承認せられた人情の發露であり、個人についていふとそれが嚴肅なる道德的義務として意識せられたのではないこと、然もその間に自ら呪術的宗教的意識から漸次人間の力と責務とが自覺せられ來る經路の認め得られることを、結論してゐる。著者がかやうな考察をなすに當つて執つたところの態度乃至方法は一にその舊著記紀の研究以來の諸研究と同じく專ら文獻上の記載をそれの內的批判によつて限定しその範圍に於て最少限度の眞實さを確保せんとするもの、その根本に於て議すべきものは殘されてゐるとしても、終始一貫一つの立場を忠實に守つてその執るところの論理を究極の點まで押進めて行くところに著者の學問的の面目があり、學界の風潮に顧慮せず、相續いてその信ずるまゝを公にするところ自ら一つのプロテストの意味をさへ汲みえられるであらう。併しながら飜つて考へればこの著が結論としてもつところ、殆ど前揭記紀の研究以來の三著——いな更に遡つて文學に現はれたる我が國民思想の研究に見るところと殆ど同じくその獨特に稱すべき學問的な發展の認め難い點に、著者の學問が既にある極限に立ち、その方法として自ら他の立場を取入れて來なければならぬところまで立到つてゐることを暗示するものがあるのではなからうか。具體的にいへば著者に於て特に卓越して認められる矛盾律に立つ辨別的（diskursiv）論理（その鋭さには洵に敬服すべきものがあるが）のみを以てしては、著者自身の立つ文獻的立場に於てさへもその解釋の妥當を期しえられないのではなからうか、短文意を盡さぬところは他日の詳論に期し度いと思ふ。（菊判　本文六〇六頁、東京岩波書店發行、定價四圓）

●聖德太子御製　法華義疏の研究——東洋文庫論叢第十八——　花山信勝著

聖德太子御製の三經義疏がわが國上代の精神史上に有する大いなる意義に就ては既に先人の勝れた研究があり、殊には最近和辻哲郎氏がその「日本に於ける佛教思想移植史」（岩波講座「哲學」所收）の中に於て極めて簡明に敍述せられるところがあつて、今改めて說くを要しないが、就中法華義疏は啻に太子自ら三經の中他の二つに勝つて重しとせられたのみならず、太子以後のわが國佛教の幹流となつた法華信仰の淵源をなすものとして特に注意せられなければならぬ。本書はこの御製法華義疏に就いて花山信勝氏が去大正十五年十月より二年間聖德太子奉讃會の援助を得て研究せられたところの成果で、全卷六編、まづ御草本のテキストの吟味より始めて、御所依の法華經原本の考證、他の註疏との傳承關係の究明に及び、就中光宅の法華義記との間に法華經科文の對比研究を行ひ、最後にこれらの研究の結論として、法華義疏に現はれた聖德太子の佛教の特質を論じてゐる。卽ち太子の佛教はその御草本によつて窺はれるやうに單なる大乘ではなくして後に「一」の字を書加へて熟字とせられた所謂一大乘にあり、萬善を同じく一因として限りなき壽命と萬德圓備の一大果に趣くことを以て理想とせられた絕對の平等思想であるとする、その解釋に於ては從來先人の說くところと必ずしも多くの相違を見出しえないけれども、然もその解釋の基礎として上述の如き綿密なテキストの考證を行ひ、幾多の圖表を作製して、既往の研究を總攬的に大成したところ、永く法華義疏研究の準據となるに足るであらう。（四六倍版本文四九六頁、別册圖版四六葉、東洋文庫發行、定價七圓）〔以上柴田〕

●正續 神史 五弓久文撰

神史は維新前後に在世した備後府中八幡宮社司五弓久文氏の編著、正續合せて二十二卷、從來僅かに寫本として傳はり、見る人稀であつたのが、今回新裝を纒うて開版され、世に現はれたのである。これ、宮地直一博士の指導により、國學院出の祠人曾根研三氏が著者の後嗣五弓友太郎氏所藏の神史轉寫本を底本として、山本信哉博士所藏本を以て校訂し、續神史は校訂者所藏本を用ゐ、五弓家所藏自筆稿本を以て校合し、訂正を加へたもの。卷末附錄として著者甥安二郎氏所撰の著者傳記を添ふ。

正編は神武天皇甲寅東征の歲に起り、明治五年に至り、十七卷を成し、これに附志引一卷を加ふ。續編は更に明治六年より同十三年に及び、四卷より成る。すべて漢文編年體を以て、歷代を通じ、神社、神祇並に神道に關する事蹟を列敍し、首尾一貫、甚だ要を得てゐる。

著者は夙に史學に志を立て、儒を學んで通鑑を好み、明治に入つては修史館にも奉職し、嘗て尊攘を說いて今彥九郎とも稱へられた人。その精神はこの書にあらはされてゐる。著者の獻納した神史は今に內閣文庫の保有に係るといふ。この書が神武以前を記さないのは「舍人親王署して神代といひ、開卷一閱神ならぬはない」といふによるので、「神武以後諸事混同、神德を載する專書がない、方今文明開化の世、新奇を弄して神典を